



しが《ろくろ首》のすみかにおびき入れられたのか……『搜神記』という書物に、頭のないろくろ首の胴体を見つけたら、その胴体を他の場所に移すがよい。そうすれば、その頭は二度と元の首につくことができなくなるであろう、と記されている。さらにその書物は続けて、こう述べている。頭が戻ってきて、胴体が無くなっていることに気がつくと、その首は床に三度自分を打ちつけて一まりみたいに跳ね返りながら一恐ろしさのあまり息も絶え絶えになり、そのまま死ぬであろうと。本当にこいつらがろくろ首ならば、きっと良からぬことを企んでいるはずだ。だとすれば『搜神記』の教えに従っても差し支えあるまい……」<sup>2</sup>

一、

『怪談』や『骨董』所収の物語に代表される小泉八雲の作品は、多く既存の古典や物語に取材し、彼独自の見解を付け加えるなどしてはいるが、同じく古典に取材しながらも、自らの作品テーマを色濃く打ち出そうとした芥川龍之介の場合とは大きく異なり、先行する物語を再話することに、より力点を置いて書かれていたことは既に先行諸家の指摘するところである<sup>3</sup>。

右に引いた「ろくろ首」の話しも、江戸時代の戯作者として知られる十返舎一九『怪物輿論』卷之四「轆轤首恹念却報福話」に基づくことが既に突き止められているが<sup>4</sup>、古典文庫

<sup>2</sup> 船木裕訳『完訳 怪談』（ちくま文庫、筑摩書房、1994年）による。

<sup>3</sup> 広瀬朝光『小泉八雲論—研究と資料—』（笠間叢書69、笠間書院、1976年）では、特に一章を裂いてこの問題を詳細に論じている（第五章「類型的作家芥川龍之介の創作方法」）。なお、同書では、「ろくろ首」と本稿で後に触れる原話の『怪物輿論』とを詳細に比較して参考になるので参照されたい（第二章「原話と創作との関連」六「ろくろ首」）。

<sup>4</sup> この方面の研究は、『小泉八雲作品集』の編者として知られる平井呈一氏が先鞭をつけられたが、同作品集（全訳）第10巻所収の解説では本作品をはじめとする幾つかの作品の出典を詳細に考証して参考になる（恒文社、1964年）。

所収の同書を見ると<sup>5</sup>、「ろくろ首」が、原話である『怪物輿論』がなかなかの長編であるのを短編へと圧縮し、さらに八雲独自の見解を付け加えるなどしてはいるが、他の彼の再話作品と同様、話の筋や内容は、概ね原話に忠実であることが分かる。

特に、『搜神記』云々については、原話に、

搜神記に曰戸頭蛭あり。頭飛び去つて後。其身を別の所に移せば。息喘急にして死すと謂へり。

とあるものを忠実に踏まえる。

ここに言う『搜神記』とは、言うまでもなく東晋・干宝編と伝えられる『搜神記』であり、より具体的には、卷十二収載の「落頭民」の話指す。

秦時南方有落頭民。其頭能飛。其種人部有祭祀、號曰蟲落。故因取名焉<sup>6</sup>。

この物語では、秦代より、落頭民の存在が知られていたとし、三国呉の將軍・朱桓の召し使う下女が夜な夜な首が抜けて外へ出るのを知った同僚が胴体に布団を被せておくと、明け方戻った首がたいそう苦しがつたという話を載せている。

<sup>5</sup> 中谷道夫編『怪物輿論 付、田舎草紙・滑稽膝栗毛』（古典文庫 497、古典文庫、1988年）。同書は享和三年（1803）三月、京都の勝村治右衛門、大阪の勝尾屋六兵衛、江戸の松平平助、石綿佐助、多田屋利兵衛の五書肆から発刊されたものである（古典文庫本に付せられた中谷道夫氏の書誌解題参照。同書 309頁）。

なお、富山大学附属図書館は、小泉八雲旧蔵書を多く収めて「ヘルン文庫」と名付けているが、そのコレクションに収蔵されている八雲旧蔵の『怪物輿論』は、このテキストの翌年の1804年（文化元年）刊とされている（『ラフカディオ・ハーン ヘルン [小泉八雲] 文庫目録：富山大学附属図書館所蔵』、富山大学附属図書館編、1999年）。因みに、同書では古典文庫で版元の一つを「京都勝村治右衛門」としているものを、「京都藤村治右衛門」とするが、正しくは勝村である。

<sup>6</sup> この文は、西晋・張華（232～300年）『博物志』卷三「異蟲」に、「南方有落頭蟲（范寧校証『博物志校証』、古小説叢刊、中華書局、1980年。なお、『太平広記』卷四八二蠻夷三では『博物志』に出ずとしながらも、「蟲」は「民」に作る）、其頭能飛。其種人常有所祭祀、其蟲即至、故因取之焉。其飛因晚便去、以耳為翼、將曉還復著體。呉時徃徃得此蟲也。」と見えるのと酷似する。時代的平仄に従えば、『博物志』の方が時代は古いのであるが、今日通行するテキストは、散逸したそれを各書から集めたものであることを考慮すれば、その先後は、にわかにはつけ難い。

ただし、八雲の拠り所とした原話『怪物輿論』が既にそうであるように、「ろくろ首」では、その生態として、ろくろ首どもは地面や木立の中に見つけた芋虫や昆虫を食べていた。

(原話:軒墀〔のき・には〕を離れし樹林のこなたに。人の声して虫物を喰ふ五つの首あり)とするが、こうした記述は『搜神記』には全く見られない。

しかし、これもまた、漢籍に来源を求めることが出来る。それは、『搜神記』より後世に成立した、唐・段成式『酉陽雜俎』巻四に、

嶺南溪洞中、往往有飛頭者。故有飛頭獠子之號。頭將飛一日前、頸有痕匝、項如紅縷。妻子遂看守之。其人及夜状如病、頭忽生翼、脫身而去。乃於岸泥、尋蟹蚓之喰。將曉飛還、如夢覺、其腹實矣。

とあるものを踏まえたものと見て良い。文中、「尋蟹蚓之喰」とあるのは、『搜神記』に言う「虫落」(虫落とし、つまり虫追いの祭り?)<sup>7</sup>を誤り伝え聞いたことによるのであろうか。或いは又、本稿注6で触れた『博物志』に見える「落頭蟲」という記述とを混同してしまった結果であるのか<sup>8</sup>。待考。

二、

さて、このように首が飛ぶ「落頭民」(飛頭蛮)の物語が、日本に移入されて「ろくろ首」となっていったことは、明らかであるが、明・王圻の『三才図会』に倣い、江戸中期の漢方医・寺島良安によって編まれた『和漢三才図会』(正徳二年〔1712〕自序、同三年林鳳岡ほか序)<sup>9</sup>や、鳥山石燕『画図百

<sup>7</sup> 農業を営む人々にとって、蝗などのいわゆる害虫は、作物の大敵であり、それを追い払う祭りは、現在も世界各地に広く散見する。

<sup>8</sup> 『博物志』が「落頭蟲」と記述していることについて、中国の神話伝説の研究で知られる袁珂は、その著『中国神話伝説大事典』の「落頭民」の項で、誤写であろうと推定する(鈴木博訳、大修館書店、1999年)。しかし、これについては、今少し詳細に考える必要があるように思われる。

<sup>9</sup> 『和漢三才図会 復刻版』(東京美術、1970年)。なお、『和漢三才図会』

鬼夜行』(安永五年〔1776〕刊)<sup>10</sup>などは共に「飛頭蛮」と表記して、「ろくろ首」と読み仮名を振っている(本稿図2、3)。ところが、本稿図1の『怪物輿論』の「ろくろ首」は、『搜神記』や『酉陽雜俎』の記述通り、身体から完全に離れた形で動き回る首が描かれているのに対して、細い線のように描かれてはいても、首が繋がっている。こうした描き方は、早く、貞享三年(1686)刊という『古今百物語評判』巻一「絶岸和尚肥後にて轆轤首を見給ふ事」にも見ることが出来る。物語は、肥後の国(今日の熊本)の一村のとある家に一宿を乞うた絶岸和尚が、真夜中、その家の女房の首が、窓の破れ目から抜け出て、明け方近く戻ってきたとし、

あやしと思ひて念比に見れば、其首の通ひしあとに白きすじのやうなる物見えたり。是れこそ轆轤首よとおそろしく、誠に過去の業因までおしはからゝるに、夜明け方になりて、其すじ動くやうにて、又もとの処より彼の首かへり、につこと笑ふやうにおのがふしどに入りぬ。

---

では、『三才図会』人物十二卷「大閩婆国」の「其国中有飛頭者。其人目無瞳子、其頭能飛云々」と言う一節を引くが、そこに描かれている人物は、服装こそ漢族のそれとは異なるものの、見る限りでは、ごく普通の人であり、飛頭を示す痕跡すら見当たらない(本稿図6参照)。

なお、本稿で参照した『三才図会』は、上海図書館所の明・萬曆年間、王思義校正本の後印本である〔上海古籍出版、1988年〕。

因みに、『和漢三才図会』では、この他、飛頭蛮の話しとして、『太平広記』に出ずとして引く部分があるが『太平広記』巻四八二「蠻夷」三を確認すると、これは、本稿で先に引いた『酉陽雜俎』巻四の記述そのままである。しかし、『太平広記』では同書の前の段に出ている「善鄯国」(『和漢三才図会』の表記。『太平広記』の原文では、鄯善国であるが、『酉陽雜俎』の原文「鄯善国」に従うべきであろう。鄯善国とも表記。現在の新疆維吾爾自治区鄯善県。中国南部ではなく、反対方向の西北地域である)の東、龍城(現在の遼寧省朝陽県十二台營子。ここでは、現在の甘肅省岷県の東北の地とする今村与志雄訳注『酉陽雜俎』1〔東洋文庫382、平凡社、1980年〕に従っておく)の西南地域に関する記述であり、明らかに『太平広記』の誤引。飛頭蛮とは本来全く別の記述なのである。なお、龍城について、熱河省朝陽県なる地名を注する本もあるが(本稿注15の④)、これは熱河省の誤記であろう。但し、この呼称は清から民国初頭のものであり、現代の解説文に用いるには不適切である。

<sup>10</sup> 高田衛監修、稲田篤信・田中直日編『鳥山石燕 画図百鬼夜行』(国書刊行会、1992年)。

とする<sup>11</sup>。そして、本稿図4に見えるように、同図2、3などと同じく、細い糸のような筋が首と胴体を繋いでいるという挿絵を載せている。これが、時代がもう少し後になると、それは細い筋のようなものから、首そのものが伸びるという形へと変わっていくようだが、首がスルスルと伸び縮みするろくろ首こそが、今日の多くの日本人が知るろくろ首の標準的な姿である。

例えば、本稿図5は、『怪物輿論』と同じ作者の十返舎一九の『たのみありばはものまじわり信有奇怪会』という作品であるが<sup>12</sup>、伝説の英雄・坂田金平（有名な坂田金時〔幼名金太郎〕の弟という設定）に、ろくろ首（左）が捕らえられたのを、恋人の見越入道（右）が、金平の叔母に化けて救いに行ったところ、正体がばれてしまったというもの。これは、酒吞童子配下の鬼・茨木童子が、「（源）頼光四天王」の一人に数えられた渡辺の綱が切り落とした自らの腕を叔母に化けてこれを取り戻したと言う有名な物語を踏まえたものである。ろくろ首を女性、男性のろくろ首を見越し入道としていることも興味深い<sup>13</sup>、一見して明らかなほど、首そのものが伸びる形に描かれていることが良く分かる。

### 三、

ろくろ首は、日本の多くの化物たちがキャラクター化されたとされる江戸期以来、首が長く伸びるという、その独特な風貌も手伝ってか、専門家と非専門家とを問わず、様々な人々が、様々な角度から、これを論じ、あるいは話題としている<sup>14</sup>。しかし、それらの情報量は膨大なものであり、

<sup>11</sup> 太刀川清『続百物語怪談集成』（高田衛・原道生責任編集『叢書江戸文庫』27、国書刊行会、1993年）所収。

<sup>12</sup> アダム・カバット校注編『江戸化物草紙』（小学館、1999年）所収。

<sup>13</sup> これについては、後に少し触れる。

<sup>14</sup> 取り分け、ここしばらく続いている妖怪ブームの影響もあってか、インターネット上では、まさに百家争鳴の感がある。

質的にも文字通り玉石混淆、その一々を検討するには、多大な時間とエネルギーとを要するが、その要点をしっかりと抑えた労作も何種か有り<sup>15</sup>、本稿を執筆する上で、裨益を受けた。その詳細については、本稿注 15 で示した各書を直接一

読していただきたいが、ここで、それらの要点をまとめるとともに、筆者の見解や付帯意見を示し、問題の整理に当たりたい。

### 【来源について】

- 1 中国伝来の落頭民（飛頭蛮）の話しが元である<sup>16</sup>。
- 2 そうした物語が生まれた背景としては、
  - a 古来、中国南部や東南アジアで首だけの妖怪が伝わっているが、これが原話ではないか（注 15④の指摘）。

<sup>15</sup> 今回、「ろくろ首」のアウトラインを考えるに際して、本稿で既に示した書籍のほか、次の各書から種々の有益な情報を得た（発行年順）。

① 柴田宵曲『妖異博物館』（青蛙房、1963年。増子が参照したのは、その文庫版〔ちくま文庫、筑摩書房、2005年〕、② アダム・カバット『大江戸化物細見』（小学館、2000年）、③ 大形徹『魂のありか—中国古代の靈魂観』（角川叢書、2000年）、④ 村上健司『妖怪事典』（毎日新聞社、2000年）、⑤ アダム・カバット『大江戸化物図譜』（本稿注 12の本と、②の本の一部を抜粋して大幅に加筆したもの）、⑥ 武村政春『ろくろ首考—妖怪の生物学』（文芸社、2002年）、⑦ アダム・カバット『ももんが対見越入道—江戸の化物たち』（講談社、2006年）。

このうち、⑥は生物学者の立場から妖怪を考察すると、どのようになるかを示したもので、考察する視点は増子とかなり大きな相違があるものの、この問題を考える言わば「初動捜査」の大きな手助けとなり、また、①はこの方面の先駆的業績であり、③はろくろ首全般について手際よく纏めているので、全体を見通すための navigation の働きをしてくれた。

<sup>16</sup> 今野圓輔『日本怪談集 妖怪編』\*では、日本にも古くから「ろくろ首」の伝承があり、これと中国伝来の落頭民或いは飛頭蛮の伝承が流入して「混乱」して今日に至ったとの説を展開するが、ろくろ首が、怪異小説集をも含む大量の漢籍が輸入され、その影響下に怪異譚の深化と発展とを遂げた近世になって俄に話題となっている点や、近世の早い時期の文献に「飛頭蛮」にわざわざ「ろくろくび」と付している点、或いは後になって、首が身体を離れて飛び回るものを「抜け首」と名づけ、首が伸びるろくろ首と分けようとしていることなどから判断すれば、支持し難い。もし、仮に近世以前にそうした伝承が人口に膾炙していたなら話は別であるが、そうした痕跡が見当たらない以上は、現段階ではこのように判断すべきではあろう。

\* 現代教養文庫（社会思想社、一九八一年）。本稿では、これを上下二分冊とした中公文庫版の上編 100 頁「ろくろ首」の項を参照した（中央公論社、2004年）。

〔引用者補説〕

これは、やはり中国の伝統的異域観を考慮しなければならないであろう。『山海経』に代表されるように、中国本土から遠い地域には、奇怪な動植物、奇怪な人々が住むとする記述が、諸書に見出される。その姿勢は時代が下って、本稿図6で引いた、明・王圻『三才図会』においても基本的に変わらない。こうした発想の理由として、『搜神記』の編者とされる干宝が同書卷十二冒頭（通行のテキスト<sup>17</sup>では300通番）で示した考えが参考になろう。

「変化論」<sup>18</sup>とも名づけられるこの章段では、五気（木火土金水）の運行が万物生成に深く関わることから説き起こし、漢土に聖人が多く生まれ、最果ての地で怪物が生まれる理由を、漢土では和合の気が交わった結果であるとし、一方、最果ての地では異端の気が集まるためであるとする（中土多聖人、和氣所交也。絶域多怪物、異氣所産）。

つまり、こうした考えに依れば、中華文明に近いところよりも、絶域つまり辺境の地ほど、こうした怪異が起こりやすいと言うこととなる。勿論、その中核となる話として、嶺南と呼ばれた中国南部の地域—今日言う広東省、広西チワン族自治区—及びベトナムの一部などに、首だけの異人の話が伝わっていたとしても不思議ではない。

b. 頭こそが魂の宿るところであるから、頭が飛ぶとい

---

<sup>17</sup> 今日通行するテキスト（二十卷本）は、清・張海鵬『学津討源』を底本に汪紹楹が校注を施したものを、北宋末・欠名氏『紺珠集』や南宋・曾慥『類説』を用いて更に校訂したと言う、古小説叢刊本『搜神記』（中華書局、1979年）に基づくものが多い。最近、出版された李剣国『新輯搜神記』（古体小説叢刊、中華書局、2007年）では、諸本を参照して三十巻と言われる原本\*の復元を試みている。このテキストは、配列なども通行本と大きく異なっている。

\* 『晋書』卷八二「干宝伝」、『隋書』卷三十三「経籍」二。

<sup>18</sup> 森野繁夫氏によれば、この章段と通行本第6卷冒頭の「妖怪論」は、共に干宝の原本にもあったと推測されるという（森野繁夫・先坊幸子訳注『陶潜 搜神後記』〔白帝社、2008年〕まえがき）。この指摘通りとすれば、この章段は、どこまでが干宝の編であるかが明確でない、現行本『搜神記』の中で、干宝その人の考え方を直接知ることの出来る資料となる。

うのは、人の魂がその頭から抜け出ていくことを言った所にろくろ首伝説の来源がある（本稿注 15③の指摘）。

〔引用者補説〕

この指摘は極めて鋭く、かつ、ろくろ首にまつわる様々な問題を解く鍵があると思われる。

大形徹氏によれば、魂は頭、更に具体的には脳に存在すると考えられており、ともすれば脳を収める頭蓋骨の合わせ目から抜け出ようとするとし、それを防ぐのが結髪であり、幽霊が、それが解けた「ざんばら髪」であるのは、魂が肉体から抜け出ていることを象徴しているのだとする。そして、夢は人が寝ている間に魂が肉体を抜け出て体験した事どもであるとし、ろくろ首については、『搜神記』所収の「落頭民」の話しを引き、頭がはずれて飛び回るといのは何とも奇妙であるが、恐らくこれは夢中に「魂」が離脱する話しがゆがめられて伝わったものであろう。

この話しによっても頭部に魂があると考えられていたことがわかる。「頭（魂）」が戻れなくなると死んでしまうのである。と説く（同書第一章「魂のありか」ろくろ首 40～42 頁）。

19

この指摘で、日本のろくろ首を考えるに際して注目されるのは、離魂、夢との関わりについてである。先行の諸説を見ると、ろくろ首の来源の一つに、「離魂病」を挙げるものが少なくない。離魂病とは、言うまでもなく、肉体から魂が抜け出てしまう病と考えられたものであり、今日言う、夢遊病や心神喪失を伴う、ある種の心の病などを指すものと思われる。

離魂乃至は離魂病にまつわる伝承は、中国でも良く語られ

<sup>19</sup> 大形氏は、更にこの文の後、日本のろくろ首の特徴とその理由についても、重要な指摘をするが、それについては、本稿第四節で、詳細に検討したい。

るが<sup>20</sup>、「夢魂」という言葉が詩語として定着を見るほど、夢は肉体を離れた魂の体験したことどもであるという認識は、中国だけでなく、日本においても普遍的であったものと思われる<sup>21</sup>。

『搜神記』以来伝承されるろくろ首の話の多くが、睡眠中に身体から首が抜け出す乃至は首が伸びていったとされることから推せば、これを肉体からの魂の遊離を象徴的に述べたものと見る事が出来るし、その状態を、往時の人々が魂の器としての頭の遊離と捉えていたと考えることもまた、十分首肯し得るものと言える<sup>22</sup>。

### 【日本のろくろ首の特徴】

#### 1 ろくろ首の男女

本稿図2に示したように、ろくろ首は、男女の区別はないものであったが、時代が下ると共に、図3に示すように、ろくろ首と言えは女のそれを指す割合が増加し、その代わりに見越入道なる男のろくろ首が登場する。しかし、見越入道の古い話（例えば、荻田安静『宿直草』<sup>23</sup>〔「見越入道を見ること」〕や、山岡元恕『百物語評判』<sup>24</sup>〔「見こし入道 もわせて泉屋介太郎のこと」〕など）では、夜何やら気配がするので、振り返ると大入道が居る。その大入道は見上げれば、見上げるほど

<sup>20</sup> 唐代伝奇として日本でも広く知られる陳元佑「離魂記」に代表されるように、離魂乃至は離魂病をモチーフとした作品は枚挙にいとまがない。

<sup>21</sup> 『古今和歌集』に収められている夢にまつわる有名な歌を何首か思い出せば、容易にこの事が理解出来る。例えば、小野小町の作という「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ。夢と知りせば覚めざらましを」などはその典型である。

<sup>22</sup> 村上健司氏も、この点について、作者不詳『曾呂利物語』\*に見える「女の妄念迷ひ歩く事」という項に、ある女が睡眠中、その魂が身体から抜け出て、鶏になったり首になったり姿を変えながらさまよい歩いたと言う話しを例にとって、「この類話は近代の民俗資料にも見え、抜け出した魂は火の玉や首となって目撃される。」と指摘する（本稿注15④「ろくろ首」の項参照）。

\* 高田衛校注『江戸怪談集（中）』（岩波文庫、1989年）。

<sup>23</sup> 高田衛校注『江戸怪談集（上）』所収（岩波文庫、1989年）。

<sup>24</sup> 高田衛校注『江戸怪談集（下）』所収（岩波文庫、1989年）。

巨大化するということであった。これが、後には、男のろくろ首として物語に登場し、本稿図 5 に示したように、ろくろ首（左）の夫という役回りを与えられたり、見越入道の九代目の子孫として「見越の介」なる粋な若者すら考え出されるに至る（図 7）<sup>25</sup>。

〔引用者補説〕

ろくろ首が女性と目されるようになった経緯は、今しばらく精査した上で考察する必要があるだろう。しかし、前項 2 の b で触れた「離魂病」なる現象が、多く女性の罹る病と考えられていたことと無縁であったとは考え難い。この事は、女性、特に客のつかない遊女や、適齢期になっても縁づかない女性たち<sup>26</sup>を揶揄する言葉とし

て、「まさか夜中に首なんぞ伸ばしゃしないだろうね。」等という軽口となって、後世にまで継承されるに至っている。<sup>27</sup>

## 2 ろくろ首と「抜け首」

本稿注 16 に示したように、日本では、首が伸びる形の「ろくろ首」が主流となる中で、首が飛ぶ形のものを「抜け首」と称して区別するようになる。

〔引用者補説〕

前述したように、首が伸びる形の「ろくろ首」の話し

<sup>25</sup> アダム・カバット『化物図譜』（小学館文庫、2000年）より引用。

<sup>26</sup> 落語などにも多くこうした言い方を聴くことが出来るが、江戸・享和元年（1801）に刊行された伴蒿蹊『閑田耕筆』巻二にも、こうした話しが見える（柴田宵曲編『随筆辞典』巻4「奇談異聞編」（東京堂出版、1961年）を参照。なお、『閑田耕筆』は、有朋堂文庫（1922年）並びに日本随筆大成第1期第19巻（吉川弘文館、1975年）で見ることが出来る。

<sup>27</sup> こうした軽口は、筆者の明治・大正生まれの筆者の親や親類たち（生まれも育ちも生粋の東京人）の間でも語られているのを耳にしている。また、落語でも、愚か者の与太郎が、格段に身分の違う良家の娘の元に婿入りするが、その相手が「ろくろ首」であったので、大慌てで逃げ帰ってきたという有名な噺がある（五代目柳家小さんの名演で知られる「ろくろ首」。明治38年〔1905年〕三遊亭円左の初演とされるが、元々は万延2年〔1861〕の段階で、既に上方で演じられていたとの指摘がある〔東大落会編『改訂落語事典』、青蛙房、1996年〕）。

が、時代をさほど大きく遡り得ず、その明確なものは、近世以降の所産であると考えられ、中国伝来のそれが、肉体から首が離れる形をとった「ろくろ首」（落頭民〔飛頭蛮〕型）が、首の伸びる形へと変容された理由、更にはそれがむしろ主流となっていたのは何故かが問題となる。この問題については、本稿第四節で少しく考察を加えることとしたい。

### 3 ろくろ首のキャラクター化

アダム・カバット氏が、その著作でしばしば指摘するように、近世は、それまで畏怖の対象であった化物に名を与え、そして細かな性質や特徴を与えていった一同氏の言葉を借りれば、「妖怪のキャラクター化」の時代であった。そうした動向の中で、河童や狸や狐などと共に、ろくろ首も人気キャラクターとして、いわば一家を成すに至り、その余波は今日迄続いている<sup>28</sup>。

#### 〔引用者補説〕

特に、数多く開かれていた見せ物小屋では、「親の因果が子に報い」と称する「ろくろ首」の見せ物（当然、作り物である）が、人気を博した。既に多くの指摘があるように、この見せ物小屋で演じられた「ろくろ首」の姿形—頸部が蛇腹状になっていてスルスルと伸びていく<sup>29</sup>—が、大方の知る「ろくろ首」像形成に大きく関わったものと考えられている。

<sup>28</sup> 2005年8月に劇場公開された映画『妖怪大戦争』（監督 三池崇史 製作総指揮 角川歴彦）では、主人公・稲生タダシの度胸試しをする為に登場するが、恐怖感よりもユーモラスさが前面に出たキャラクターとされている。

<sup>29</sup> 当然これは作り物であり、実際の人間の頭部を作り物の胴体の上に乗せて、蛇腹状に仕組んだ、これまた偽の頸部を、スルスルと伸ばしてみせるという体のものであり、これが、大方のイメージする「ろくろ首」像のベースとして定着したと考えて良いであろう。

## 四、

さて、以上のように、落頭民、飛頭蛮と中国で呼ばれた化物—と言おうか、異人と言おうか—の話しが、我が国に伝来して、先記ように日本的変容を遂げたと考えられたのだが、ここで整理しておくべきなのは、何故元々身体から離れて浮遊すると考えられていたものが、肉体としっかり繋がって、首のみが伸びるという形に変容されていったかという点である。

この問題は、或いは先行の人々はあまりに当然すぎて、改めて論ずるまでもないと考え、敢えて触れることをしなかったかとも考えられるが、むしろ当然と思っていることにこそ、見落としや思い違いなどが潜んでいることが少なくない。そこで、本節では、この問題を整理・検討しておくこととしたい。

\*

\*

大形徹氏は、首が体を完全に離れる落頭民(飛頭蛮)型の「ろくろ首」に対して、首が伸びる乃至は首が肉体と紐状に繋がっているタイプの「ろくろ首」があることについて、「魂が肉体から離れていないことを示しているのだろう。」と指摘する<sup>30</sup>。江戸期のろくろ首図の比較的古い時期のものほど、首が伸びると言うよりまるで細い紐乃至は糸のように、首と肉体とをつなげて描いているのは、まさしく氏の指摘される通りであろう<sup>31</sup>。

ろくろ首伝説が、離魂乃至は離魂病と関連づけて考えられてきたことを思い合わせれば、肉体から完全に切り離された

<sup>30</sup> 『魂のありか』(本稿注 19) 42 頁。

<sup>31</sup> 先に引いた『古今百物語評判』巻一「絶岸和尚肥後にて轆轤首を見給ふ事」に、「首の通ひしあとに白きすじのやうなる物見えたり。」とあるのは、その古い形を留めるものと考えて良いであろう。

魂が再び戻れないという事態は、すなわち死を意味する。『搜神記』に収められる「落頭民」の話でも、明け方近く戻ってきた首が、身体にすっぽりとかけられた掛け布団に遮られて元に戻る事が出来なくなり、七転八倒の苦しみを示すという記述があり、別の話として、ある人が、落頭民の首が身体を離れた隙に大きな銅盤で身体を覆ったところ、首が戻れなくなり、やがて死んでしまったと言う記述も加えているのは、この辺りを言ったものと見て良い。

つまり、ろくろ首と身体とが細い紐状に繋がっているという形で描かれるのは、この人物が身体から首は離れてはいるが、決して死んだのではなく、生命を維持しているのだという事を象徴していると考えられる。

更に、これに江戸時代人の「首が飛ぶ」ことへの強い畏怖乃至は禁忌の情も加わっていたことをも併せ考えるべきであろう。

良く知られているように、魚の開き方として、「江戸の背開き、上方の腹開き」という言葉があるが、武家が人口の多くを占めていた江戸では、魚の開き方にまで、「切腹」を連想させる腹開きを厭い、その伝統は今日に至まで継承されている<sup>32</sup>。

「首が飛ぶ」に至っては、刑罰としての斬首を連想させるものであり、「腹を切る」以上に禁忌の意識があったと考えて良い。知られているように、武士の切腹に際して介錯する場合は首の皮一枚を残すのをしきたりとし、それをし損じると、斬首と同じ事となってしまう、介錯をし損じた人も、その責めを負って腹を切らねばならぬ仕儀となる。それほど、武士

<sup>32</sup> 新潟県の三面川は、鮭の人工孵化に日本で初めて成功した所として知られるが、当時の村上藩の殖産興業という側面から広がったことも影響し、今日に至るまで、「塩引き」にするために鮭の腹を開いても、その一部を切り残す方法（止め腹）が伝わっている。これもまた、切腹のイメージを避けてのこととされている。

の切腹の介錯と、刑罰としての斬首は、極めて厳密に区別されていたのであった<sup>33</sup>。

こうした「首が飛ぶ」ことに対する強い禁忌乃至は嫌悪の情を背景として、前記した首を身体と繋ぐ細い紐状の「ろくろ首」の描き方が、より強固な形で広く定着したと見ることは、当時の情況に即したものと考えて良いだろう。

これがやがて、首そのものがスルスルと長く伸びていくという、今日広く知られる「ろくろ首」像へと変容させられるのは、前記した見せ物小屋で考案された「工夫」も少なからず関与したであろうが、このように非合理的なものに対しても、少しでも合理的に解釈しようとした当時の人々の意識をも考え合わせるべきであろう。他の数多くの化物たちが、時代の変遷とともに、非合理は非合理なりに何とか合理的乃至は現実に即した方向でキャラクター化されていったことは、その例を挙げるのに、さほどの不自由を要しない<sup>34</sup>。

怪しい話でも不思議な話でも、後になればなるほど、まことしやかな話が付け加えられるのも、そうした気持ちの表れなのであろう<sup>35</sup>。

「ろくろ首」の話に即して言えば、江戸期の随筆にも、その痕跡を辿ることが出来る。その多くは、ろくろ首の实在を説き、中には、首が長く伸びると言っても長押しにまで伸びたというのは嘘であり、首が伸びると言ってもせいぜい一尺程

<sup>33</sup> 幕末に活躍した新選組局長・近藤勇が、武士として切腹を希望したにも関わらず、その出自が非武士階級(武州多摩の郷士)であったことを理由として斬首刑に処せられたこと(実は、新選組によって殺された、討幕派の同志たちの報復)も思い起こされよう。

<sup>34</sup> 平戸藩主・松浦静山まつらの『甲子夜話』や根岸鎮衛やすもり『耳袋(囊)』などでは、河童を始めとする様々な妖怪変化の類を論じて、多くその实在を説くが、こうした不合理な存在を出来る限り合理的に解釈しようとしている点が興味深い。

<sup>35</sup> 少し以前、日本全土を騒がせ、あつという問に人々の口の端に上ることのなくなった「口裂け女」の話を考えても、姉妹であるとか、整形手術に失敗したとか、陸上競技の選手であったとか、いかにもまことしやかな様々な「情報」が付加されていったことを思い起こせば、了解されよう。

度であるとの「目撃者」の談話を載せるものまであるに至る<sup>36</sup>。

おわりに、

以上、ろくろ首について、日中(中日)比較の立場で、これを検討したが、この他にも、中国伝来の妖怪変化の類が、日本の変容を遂げた例は少なからず見出される<sup>37</sup>。

この際、問題となるのは、何でも中国伝来であるとする立場や、全てが日本古来のものであると声高に主張する態度である。

これまで見た「ろくろ首」の例でも明らかのように、たとえその元が中国のものであっても、日本の変容は少なからずあるのであり、それを単なる中国の物真似と見ることは出来ないほどの水準に達しているという事実を忘れてはならない。

オリジナルが何かを探る営みとともに、それがいかに変容して行ったかを辿る営みを続ければ、殊更に自国のオリジナリティを誇って他国を蔑んだり、オリジナリティの不足を嘆いて卑屈になったり、それを嫌って逆に排他的になったりする愚から、私たちを多少なりとも解放してくれるのではないか。ここにこそ、互いの国の文学や文化を比較する一つの大きな意味が潜んでいるように思うのだが、如何なものであろうか。

<sup>36</sup> 伴蒿蹊『閑田耕筆』巻二(本稿注 25 参照)。同書では、ろくろ首の实在を証明するため、この他、数多くの「実見談」を集めてこれを論じている。

<sup>37</sup> 増子も、これまで、冥界からの使者(死神)や、眉目口眉のない化物「のっぺらぼう」などについて、幾つかの論考を草している。\*

\*「死神」談義—中国古小説を中心として—(『文学における死生観』[『梅光女学院大学公開講座論集』第 38 集、笠間書院、1996 年])。「のっぺらぼう」考(上)—中国古典文学の観点から—(『中国詩文論叢』25 集、中国詩文研究会、2006 年)、「のっぺらぼう」考(中)—中国古典文学の観点から—(『中国詩文論叢』26 集[中国詩文研究会、2007 年])、「のっぺらぼう」考—その「正体」を中心として—(『梅光学院大学公開講座論集』第 56 集、笠間書院、2008 年 6 月刊行予定)。

【付記】本稿は、2008年2月に本誌を刊行する輔仁大学日本語文学系大学院において行った集中講義の一部の内容に、手を加えたものである。茨城大学教授（元梅光学院大学教授）

【図版一覧】



図1 「ろくろ首図」 1（十返舎一九『怪物輿論』）

図 2 「ろくろ首図」 2（寺島良安『和漢三才図会』）

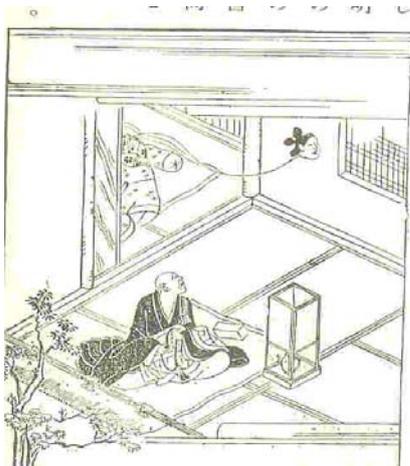


図 3 「ろくろ首図」 3 (『画図百鬼夜行』陽之巻)

図 4 「ろくろ首図」 4 (『古今百物語評判』)





図 5 「ろくろ首図」 5 (十返舎一九『信有奇怪会』)

図 6 「大閻婆国人図」 (明・王圻『三才図会』)



図 7 「見越の介」 (「雪女廓八朔」)